

岷江入楚の「肩付無之分」

——真木柱巻を中心に——

岷江入楚は中院通勝が「古来の註釈」を「一覽のためにしるしあつ」めた書として知られる。近年、源氏物語の注釈についての研究が進み、様々な方向から注釈書のあり方が明らかにされた。しかしながら、通勝の岷江入楚編集については未だ不明な点が残されている。

岷江入楚の「此抄引処ノ肩付」とする注記の中で、通勝は「諸抄ニ不注之処ニ肩付無之分ハ予カ註加也」と記している。「秘」「箋」などと肩付に記して引用する注の他に、「肩付」に記さない通勝説があるというのである。岷江入楚真木柱巻には、六百十八項目の注記があるが、そのうち二百四十項目には肩付に典拠を付した注記がない。「私」とする注記六十六項目（「私」とは注記がないが「私」と同様の内容の注をあわせると七十三項目）とあわせると、真木柱巻の注記の半数を超える。岷江入楚は古注集成とされるが、古注を集成する際に通勝が取舍選択を加えていたほか、半数を超える項目について、通勝自身の注記を加えているのである。これらの「予カ註加」分は、どのように

して注記されたのであろうか。本稿では、「肩付」に書名等を記さない通勝説について検討を加えたい。¹⁾

一 「肩付無之分」

まず、真木柱巻の注記から、「肩付」の付された注が見られない項目を一覧してみたい。岷江入楚の引用は源氏物語古註釈叢刊により、源氏物語古注集成の番号で項目を示す。参考のために細流抄、明星抄、源氏物語紹巴抄（以下、紹巴抄と略す）、孟津抄、陽明文庫蔵長珊聞書、幽斎源氏物語聞書に注記のある項目に○印を付す。²⁾ 表には注釈書名の漢字一字を記した。

小 高 道 子

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
62	61	57	56	55	52	44	43	42	40	39	33	31	30	28	25	22	20	14	6	4	3	
いとおかしけに	すこしのそきつ、	とのもいとおしょうよい	すくよかなるおりもなく	女君のあやしう	紫のうへにもおほしう	あらさりしさま	大将は名にたてるまめ	おこかましう	宮などはまいて	大将殿ひるも	すくせことなりける	かうしのひ給ふ	有かたしとはおもひ	き、つたへて	けにみかと、きこゆとも	こまかなるうしろみなき	をとなく	人のためいとおし	いみしうつらしと	さしもえつ、み	いさめ給へと	岷
																						細
																						明
			○												○				○	○		紹
	○	○		○			○		○		○	○			○							孟
																						長
																						幽

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
139	134	131	129	127	122	114	113	112	109	107	104	102	101	100	98	97	94	89	84	82	75	65
ほとにつけつ、	まことにおほしをきつる	ひとわたりみはて給は	とさまかうさま	えさしもありはつましき	心にはいとあはれと	おやの御あたり	宮のひんかしのたい	いと人わらへなるさま	人わろくて	ことはりになむ	めつらしう御心うつる	御中もあくかれ	うつし心なき	このとしころ人にも似給	御かたちなども	いみしうかしつき	人の御心うこき	わかとの、うち	いとかうおほしたるさま	こまかにきこえ給	き、くるし	くちおし
		○				○	○			○	○		○						○		○	
				○																		

68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
183	181	179	177	175	173	166	165	164	162	161	159	158	157	156	154	152	151	149	148	146	143	140
北のかたけしきをみて	いとおひらかに	中／＼ことつけて	雪かきたれてふる	日ひと日いりゐて	かく思ひおとされたる	末の世に	しらぬさまにておひい	こと人にやはものし給	いかてかみえたてまつ	世の人に、ぬ身のうき	こしらへ	かたみにうしろみんと	まろかためにも	宮にわたり給へとも	おほきおと、	心やすくうつろはし	うぬ／＼しくきすくなる	もてやつし	かみいとけうらにて	ひわつにて	いとさ、やかなる	いとなつかしう
					○		○	○	○						○					○	○	○
				○	○	○	○			○				○								

91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69
247	246	245	243	240	232	227	222	221	218	214	208	207	203	202	201	200	197	193	192	191	188	185
君たちはかりをそ	とのにわたり給ふとき	あるまじきすもつき	久しうこもり	ことの外なる	ふすへられたるほと	おとこむねつふれて	よへにはかに	かしこへ御ふみ	覚ししつめて	うつし心にてかくし給そ	まほにはあらて	さふらひに人／＼こゑし	ちいさき火とり	そらなけきを	いかて過しつる年月を	みる時はつみなうおほ	御火とりめして	ほかさまにわくる心	こ、になとわたし	思ひしつめて猶みはて	猶この比はかり	そ、のかし給
				○											○							
							○	○						○	○							
											○											
																	○					

114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92
287	285	284	282	281	279	278	276	268	267	266	265	264	263	261	260	258	256	255	254	253	251	249
つねによりゐ給ふひん	たゝいまもわたり給は	かくおほしたるなん心	みたてまつらでは	ひめ君は殿いとかなし	日もくれ雪もふりぬへ	かゝり所ありても	時にうつろひ人にした	おひさきとをうて	ともかくもさすらへ	みつからかく心うき	母君みなよひすへ	さるへきはしたゝめをき	しつませ給なんに	せはくはしたなく	としころならひ給はぬ	御せうとのきんたち兵	かくときこえ	世中をあさましよう	北のかた御心ち	をのかあらん	さて心つよくものし	さふらふ人くも
	○												○		○							○
	○			○		○				○					○	○			○			
													○									

137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115
364	363	362	354	347	345	340	339	337	332	331	330	329	328	324	316	313	312	308	305	304	293	291
はしたなくて	風おこりてためらい侍	宮にも御けしきたまは	返々きこえても	みちすから	おさなき人くも	ありしさま	もくの君など	宮にうらみきこえんとて	人のきゝみる事も	かの宮のし給ならん	をだしう思ひ	さてかたすみにかくろ	中く心やすくは	わかくしきならひの	つれなうてみなかのし	宮はあなきゝにくや	いかはつらからぬと	ためしこそあれと心え	世の人はいひなしゝ	覚しのためひ	かくてわかれたてまつ	もくの君
		○										○	○		○			○				
		○		○				○			○	○			○							
								○				○										

160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138
426	422	416	413	409	408	406	405	402	388	386	384	382	380	377	375	373	372	371	369	368	367	366
いとつらしと	御かへりなし	おなしごとかつけた	やんことなくましらひな	うちの大との、きんたち	竹川	朱雀院	御まへの中宮の御かた	さと人まいりさまことに	人々もおほす所	さまたけきこえつるを	かゝること、ものさはきに	さいへと思ひやりふかう	うちにも心をき	おとゝのきみ	宮にはいみしう	うちたえてをとつれもせ	よろつをなくさめ	ひがくしき御さま	物おもひくは、りぬる	うちなかめていと心ほ	こゝにあれ	六条院二ハえゐておは
																○						
																○						
○				○								○	○				○	○				
		○				○	○				○	○		○		○						○
	○				○					○												

183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161
492	490	486	483	479	478	477	476	474	470	463	462	461	458	453	447	444	439	436	432	431	430	429
かけはなれぬけはひ	いとかたしけなしとみ	ことなることなき事なれ	えおはしましはなれす	かたしけなう	なつけ給ふも	ひたふるにあさきかた	はしめよりさる御心な	けしきとりしたかふよ	まかてさせ給へきさま	おもしきさま	いとうたても	まめやかにわつらはし	うちゑみて	いとわかきよらに	かほをもてかくして	これはなとかさしも	おもてあかみて	しぶくみたまふ	この御つほね	御前の御あそひ	兵部卿宮	うちかけきて
		○	○													○						
○		○		○	○	○	○	○		○	○		○				○	○				
																○						

206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184
534	532	527	524	523	522	521	520	519	517	515	514	513	512	510	508	506	501	499	497	495	494	493
朱雀院の後の	人もみはうたてあるへし	おほつかなくてやはと	ときくむつかしかりし	けにいかてかはたいめ	まほにこひしやいかて	程ふるまゝにわか御心	うちなきて	ひまにしのひてみせた	つれくゝにそへてもうら	たゝおもはせ事	かつは思はんことを	雨いたうふりてのとや	はかなきたはふれこと	すくせなといふものをろ	大殿は	さこそたけう	六条とのそいとゆくりな	ぎしきなきやうにやと	おひらかに	かねてはゆるされ有ま	やかてこよひかの殿に	かへりみかちにて
		○									○						○		○	○		○
			○					○			○				○		○		○	○	○	
		○																				

229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207
584	582	581	578	576	575	571	569	568	567	565	562	560	551	549	548	547	545	544	542	541	537	536
明くれおかしき事	おとこ君たち	此父君を誰もくゆるし	大将殿は大かたの	かのもとの北方は	心のうちにはかくらう	かたはらいたしや	御かへりこゝにはえ聞え	にくしとき、給	ましてこのおとゝの	大将みたまひて	御心ひとつにのみは	御ふみはあまり人もそ	先みるかひありて	身をうき物に	御ふみはしのひくゝに	御ことくさ	うちにもほのかに	こひしき人にみせたらは	なつかしうひきなし	御ことかきならし	すいたる人は心からやす	よづかずそあはれなりけ
			○				○				○											○
	○	○			○			○	○		○	○			○				○	○	○	○
						○											○					

240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230
610	607	606	605	602	601	596	593	591	589	586
こゑいとさはやかにて	いとさがなけにらみて	人よりもことにもとめつる	れいならすみたれて	おとゝのいまは	色めかしう	今までみこたちのおはせ	頭中将もこのかんの君	をのつから思ふやうなる	そのほとけありさまはい	やすらかにふるまふ
			○							
			○							
		○			○					
		○		○		○	○		○	○
						○				

この表から、通勝が「肩付」を記さずに書き加えた注には、項目によつては肩付を付して引用したことのある注釈書を参照していることがわかる。「肩付」を記さない240項目のうち、45項目が紹巴抄と、86項目が孟津抄と一致する。両者に共通する項目も18項目ある。岷江入楚が「秘」とする注記を記した項目においても、「聞」「九禪」などとして、紹巴抄・孟津抄にも注記が見られることを指摘する記述は特に孟津抄では少なかった。通勝はなぜ、これらの注釈書名を記さなかったのであろうか。

肩付きのある注釈書は引用していないが、紹巴抄と孟津抄、幽齋聞書に注記が見られる 329 さてかたすみにかくろへても の注記を比較してみよう。

岷江入楚

鬚黒のかたにおはするとてもはた角に心やすくをかんする物をとをしけちたるさまにいひなし給ふ也 御子たちなほければかやうなるを外聞いか、と思ひ給ふさま也

紹巴抄

北方は玉のワタリ給ふかたすみにも堪忍あらん人にて有しと語給ふ也

孟津抄

片角にもかくしてあらはむつかしからんにと髻詞也

幽齋聞書

カタハラニスムト也聞書

岷江入楚の注記は、どの注釈書とも一致しない事が明らかである。通勝は諸注を参照しながらも、自分の説を記したのであろう。

ここで改めて「此抄引処ノ肩付」とする注記を見てみよう。「此抄引処ノ肩付」とする注記には、「河」「花」「弄」「秘」「箋」「或抄」(但し書き付き)しか記されていない。岷江入楚が「一覽」しようとしたのは、「此抄引処ノ肩付」に記された三条西家の注釈及び、三条西家において継承された河海抄から弄花抄に至る注釈書であったのではないだろうか。こうした三条西家において継承された諸説を集成するために岷江入楚を編集したとすると、紹巴抄・孟津抄・長珊聞書の記事の大半が岷江入楚に引用されていないことも、首肯される。

ここで想起されるのが実践女子大学蔵常磐松文庫九条家本源氏物語

聞書にみられる「宮にいとよく——是より以前は臨江齋二聞是より以後は末まで透して三光院ノ御講釈を聞と素然御物語也」という記述である。「宮にいとよく」「以後は末まで透して三光院ノ御講釈を聞」いたのであれば、三条西家の諸抄を伝えるために、公条説を伝える他の注釈書を参照する必要はない。若菜以降の巻において、紹巴抄・孟津抄・長珊聞書の記事がほとんど見られないことも同様に首肯されよう。岷江入楚と先行注釈書については改めて検討する必要がある。

注

- (1) 「私」として記された通勝説については「岷江入楚の「私」説」(『中京大学国際教養学部論叢』平28・3)において検討を加えた。
- (2) 古注の引用は、細流抄・孟津抄は源氏物語古注集成、明星抄は源氏物語古註叢刊、紹巴抄は平安文学資料稿、幽齋聞書は統群書類従完成会、長珊聞書は国文学研究資料館のマイクログフィルムによる。
- (3) このことについては「岷江入楚の「秘」「聞書」「九禪」「或抄」」(『中京大学国際教養学部論叢』平28・3)において検討を加えた。